現代の青年における「草食系男子」の増加言説の検討

―恋愛に対する態度に注目して―

日高　優[1]・三好康代[2]・山下輝美[2]
横田まき子[2]・村上昭史[2]
湯浅英幸[2]・大久保智生[3]

要　旨

本研究では、現代の青年における「草食系男子」の増加言説について、大学生を対象に検討を行った。調査の結果、現代の青年男性の恋愛に対する態度の消極化は認められず、女性においても恋愛に対する態度の積極化は認められなかった。また、草食系男子・肉食系女子増加の言説は広く青年の間で流布しており、草食系男子・肉食系女子が増加したと考える理由の多くはメディアで頻繁に取り上げられている内容と一致しており、草食系男子・肉食系女子が変わらない、または減ったと考える理由には実際の自らの経験によるものが多いということが明らかになった。

キーワード：草食系男子、肉食系女子、恋愛に対する態度、言説、青年

問題と目的

恋愛に積極的でない男性を、世間では他の動物を襲うことがない草食動物を連想して「草食系男子」と呼ぶ。近年、この「草食系男子」が現代の青年の間に増加しているといわれており、今や「草食系男子」は現代の若者を象徴する言葉として世間に定着するまでに至っている。本研究では、このように広く社会に流布する現代の青年における「草食系男子」の増加言説について検討することを目的とする。

「草食系男子」をめぐっては、近年様々な議論が行われている。雑誌やテレビでは、「草食系男子」の特徴を特集し、このような青年男性に対する恋愛のアプローチ方法や人付き合いの仕方、さらには「草食系男子」をターゲットにした消費市場の開発が検討されている（森岡，2011）。また、これらのメディアでは、「草食系男子」が現在の我が国の少子化や不景気の原因として取り上げられることも多い（日経BP社，2009；日経BP社，2011）。その一方で、「草食系男子」とは、優しさを含んだ新しい男らしさの象徴であり、男女共同参画社会の実現に必要な存在であるといった肯定的な意見もみられる（深澤，2007；金子，2009；森岡，2011；牛窪，2010）。こうした「草食系男子」に関する議論を概観すると、「草食系男子」が現代の青年の間に増加しているという前提の上で議論が展開されていることがわかる。

1　岡山大学大学院
2　香川大学大学院
3　香川大学

青年の恋愛に対する意識や態度に関しては、国内外で様々な研究がなされてきた。しかし、現代の青年における「草食系男子」の増加を実証的に示したデータは見当たらない。先行研究の多くにおいて、青年期には異性への関心や接近欲求は高まり、実際に異性との交際経験や接触経験も増加することが明らかにされている（日本性教育協会，2011）。また、男性の方が女性よりも恋愛に対して情熱的で、のめりこみやすいことも示されており（Hendrick & Hendrick, 1986；Hendrick & Hendrick, 1995；松井，1998；水野，2006；和田，1994）、これまでの恋愛研究においては、青年の恋愛傾向は「草食系男子」とはむしろ逆の特徴が示されてきたといえる。そのような中、近年、実態調査によって恋人がいない青年や恋人を欲しいと思わない青年が増加していることが報告されている（高坂，2011；厚生労働省，2014）。しかし、恋人がいない青年や恋人を欲しいと思わない青年が、必ずしも恋愛に非積極的な青年であるとは限らない。パートナーエージェント（2011）の調査では、40代以下の男性の約７割が「自分を草食系男子だと思う」と回答しているが、メディアの影響により「草食系男子」の定義は多様化しており（森岡，2011）、この「草食系男子」という言葉がどのような青年を指しているか定かではない。したがって、こうした調査結果は現代の青年における「草食系男子」の増加を明確に示しているとは言い難い。

また、近年の「草食系男子」に関する議論では、現代の青年の間に「草食系男子」が増加した要因についても論じられることが多い。例えば、牛窪（2010）は現代の青年に「草食系男子」が増加した要因として、彼らが日本経済の高度成長期やバブル期を知らず、男女平等の教育を受けて育ったことに起因する傷つきやすさ、自信のなさ、競争欲の低下、男女平等感の上昇を指摘している。しかし、現代の青年においてこれらの特性が過去と比較して変化したことを示したデータは見当たらず、現代の青年の恋愛における非積極性が、このような要因に起因しているかどうかについても実証的に示されてはいない。

人々の間で自明で常識的だと考えられ、一般的に信じられているものは「言説」と呼ばれる（大久保・牧，2011）。しかし、「言説」は、実際には何の根拠もなく社会に流布している場合が多い。大久保・澤邉・赤塚（2014）は、現在の子どものコミュニケーション能力が低下しているという言説に対して検証を行い、過去と比較して現在の小学生の社会的スキルが低下していないことを示した。また、子どもと接する機会が少ない青年であるほど、こうした言説を信じていることも明らかにし、言説が先入観を形成し、子どもとの関わり方に影響を及ぼす危険性を指摘している。現代の青年における「草食系男子」の増加についても、根拠のないまま社会一般に疑うことなく信じられている言説であるといえ、社会における青年に対する見方を歪めてしまっている可能性は否定できない。したがって、現代の青年における「草食系男子」の増加言説について実証的な検討を行い、このような言説を今一度問い直す必要があるといえる。

本研究では「草食系男子」が現代の青年の間に増加しているという言説に焦点を当てて検討を行っていくが、前述のように、現在「草食系男子」については様々な特徴が述べられ、その定義は多様化している。本研究では「草食系男子」を、提唱された当初の意味である「恋愛に積極的でない青年男性」と定義する。また、一般的に「草食系男子」が増加している世代として、現在の20代から30代の男性を指すことが多い（牛窪，2010）。そのため、本研究ではこれに該当する世代である大学生を対象に検討を行っていくが、近年、現代の青年女性における「肉食系女子」の増加も叫ばれている。「肉食系女子」とは、「草食系男子」から派生した名称であり、「恋愛に積極的である青年女性」を指す。しかし、「草食系男子」と同様に、実証的なデータで示されることがないまま現代の青年女性の間で増加していると考えられている。したがって、男子学生における「草食系男子」増加の検討を行うだけでなく、女子学生における「肉食

系女子」増加についても検討を行っていく。

具体的には、まず、過去と比較して草食系男子・肉食系女子は増加しているのかについて明らかにするため、大学生を対象に恋愛に対する態度、また、草食系男子・肉食系女子増加の要因といわれている、傷つきやすさ、自信のなさ、競争欲、男女平等感について信頼性・妥当性の確認された尺度を用いて測定し、その調査結果を過去のデータと比較する。さらに、現代の青年の恋愛における非積極性がこれらの要因に起因しているのかについて検討する。次に、草食系男子・肉食系女子が増加しているという言説が青年に流布している程度とその原因を明らかにするため、大学生の草食系男子・肉食系女子増加のイメージとその根拠との関連を検討する。

方法

調査対象者と調査時期

2014年12月に香川県、岡山県の国公立大学計２校の学生合計351名を対象に調査を実施した。回答は全て無記名で行い、調査用紙には回答の自由と個人特定の不可を明記した。

質問紙の構成

尺度は全て、信頼性・妥当性が確認されており、かつ過去のデータとの比較が出来るように平均値と標準偏差が明記されているものを用いた。

①フェイスシート；性別、現在と過去の恋愛状況について尋ねた。現在の恋愛状況は、和田（1994）と小塩（2000）を参考に、「恋をしていない」、「片思いの人がいる」、「恋人が１人いる」、「２人以上の恋人とつきあっている」、「一緒に住んでいる」、「結婚している」のいずれか１つに回答を求めた。また、過去の恋愛経験は、今までつきあった人数、過去数か月間の失恋の有無について回答を求めた。

②恋愛に対する態度；和田（1994）の恋愛に対する態度尺度を用いた。この尺度は、好意とは異なり、性的に魅力を感じる対象に対する肯定的感情である恋愛に対する態度を複数の次元から測定するものである。「恋愛至上主義」、「恋愛のパワー」、「結婚への恋愛」、「理想の恋愛」の４因子全34項目で構成されており、回答形式は「そう思わない」（１点）から「そう思う」（５点）までの５件法である。

③不快情動回避心性；「傷つきやすさ」を測定するため、福森・小川（2005）の不快情動回避心性尺度を用いた。この尺度は、抑うつや不安などの自らの不快な情動をあらかじめ回避しようとする心性を測定するものである。全10項目で構成されており、回答形式は「全くあてはまらない」（１点）から「非常にあてはまる」（７点）の７件法である。

④自尊感情；「自信のなさ」を測定するため、桜井（2000）の自尊感情尺度を用いた。この尺度は、Rosenberg（1965）の自尊感情尺度の日本語版（星野，1970）をもとに表現を修正し、新たに妥当性の検討を行ったものである。全10項目で構成されており、回答形式は「いいえ」（１点）から「はい」（４点）までの４件法である。

⑤競争的達成動機；「競争欲」を測定するため、堀野・森（1991）、森・堀野（1989）の達成動機尺度のうち、「競争的達成動機」因子を用いた。この尺度は、他者をしのぎ、他者に勝つことで社会から評価されることをめざす達成動機を測定するものである。全10項目で構成されており、回答形式は「全くあてはまらない」（１点）から「非常によくあてはまる」（７点）までの７件法である。

⑥平等主義的性役割態度；「男女平等感」を測定するため、鈴木（1994）の平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）を用いた。この尺度は、男女の性役割態度における平等志向性、あるいは伝統志向性のレベルを客観的に測定するものである。全15項目で構成されており、回答形式は「ぜんぜんそう思わない」（１点）から「まったくその通りだと思う」（５点）の５件法である。

⑦草食系男子・肉食系女子増加のイメージと根拠；「過去と比較して草食系男子（恋愛に積極的でない青年男性）は増えたと思いますか」、「過去と比較して肉食系女子（恋愛に積極的である青年女性）は増えたと思いますか」という

質問に対して、それぞれ「増えたと思う」、「変わらないと思う」、「減ったと思う」の３件法で回答を求めた。さらに、それぞれの質問に対して「あなたがそう考える理由は何ですか。思いつくだけ書いてください」という質問に自由記述で回答を求めた。

結果と考察

尺度の検討

各尺度の性差を検討するため、各尺度得点を従属変数とし、性別を独立変数としたt検定を行った（Table 1）。その結果、恋愛に対する態度尺度のうちの「恋愛至上主義」と「結婚への恋愛」、「平等主義的性役割態度」尺度に有意差が認められた。「恋愛至上主義」は男性が女性よりも有意に得点が高く（$t(323)=3.39$，$p<.01$）、「結婚への恋愛」は女性が男性よりも有意に得点が高かった（$t(323)=5.28$，$p<.001$）。これは、男性が恋愛をよりロマンチックに捉え、女性は結婚へつながる手段としてより実利的に捉えているという和田（1994）の結果と一致していた。「平等主義的性役割態度」尺度は女性が男性よりも有意に得点が高く（$t(323)=2.52$，$p<.05$）、女性は男女平等志向性が高いという鈴木（1994）の結果と一致していた。

各尺度の現在の恋愛状況による差を検討するため、各尺度得点を従属変数とし、現在の恋愛状況を独立変数とした一要因の分散分析を行った（Table 2）。分散が等質でない場合には、Welchの方法を用いた。なお、現在の恋愛状況については、「２人以上の恋人とつきあっている」、「一緒に住んでいる」、「結婚している」と回答した者は少なく、それぞれ全体の1.0％にも満たなかったため、「恋人が１人いる」と合わせて「恋人がいる」として分析を行った。その結果、恋愛に対する態度尺度のうちの「恋愛のパワー」（$F(2, 158.95)=9.33$，$p<.001$）、「自尊感情」尺度（$F(2, 319)=3.25$，$p<.05$）は３群間に有意差が認められた。Tukey法による多重比較を行った結果、「恋愛のパワー」は、「恋人がいる」が「恋をしていない」よりも有意に得点が高く、恋人の存在によって恋愛のパワーを感じるようになるという和田（1994）の結果と一致していた。「自尊感情」尺度は「片思いの人がいる」が「恋をしていない」よりも有意に得点が高かった。加藤（2012）では、片思いに伴う努力やそのプロセスによって感じる喜びは有能感を高めることが示されている。また、桜井（2000）では、有能感が高いほど自尊感情は高いことが明らかにされており、本研究の結果はこれらの先行研究と合致したものと考えられた。

各尺度の過去の恋愛経験による差を検討するため、まず、各尺度得点を従属変数とし、今まで付き合った人数を独立変数とした一要因の分散分析を行った（Table 3）。分散が等質でない場合には、Welchの方法を用いた。今まで付き合った平均人数は、2.19（SD＝2.26，範囲

Table 1　性別による各尺度の平均値の比較

		男性（N＝99）	女性（N＝226）	t値
恋愛に対する態度	恋愛至上主義	2.53（0.66）	2.28（0.60）	3.39**
	恋愛のパワー	3.23（0.61）	3.21（0.60）	0.21
	結婚への恋愛	2.96（0.47）	3.24（0.42）	5.28***
	理想の恋愛	2.76（0.62）	2.70（0.56）	0.85
不快情動回避心性		3.86（1.15）	4.03（1.07）	1.30
自尊感情		30.74（4.95）	29.53（5.53）	1.87
競争的達成動機		4.95（1.01）	4.75（0.84）	1.95
平等主義的性役割態度		52.84（8.85）	55.32（7.88）	2.52*

カッコ内は標準偏差　*$p<.05$，**$p<.01$，***$p<.001$

Table 2　現在の恋愛状況による各尺度の平均値の比較

		恋していない（N＝157）	片思い（N＝60）	恋人がいる（N＝105）	F値
恋愛に対する態度	恋愛至上主義	2.28 (0.64)	2.39 (0.57)	2.45 (0.64)	2.53 n.s.
	恋愛のパワー	3.10 (0.65)	3.24 (0.57)	3.40 (0.50)	9.33*** 恋人いる＞していない
	結婚への恋愛	3.17 (0.43)	3.21 (0.47)	3.10 (0.49)	1.39 n.s.
	理想の恋愛	2.69 (0.58)	2.78 (0.53)	2.74 (0.60)	0.59 n.s.
不快情動回避心性		3.95 (1.09)	3.94 (0.98)	4.05 (1.17)	0.33 n.s.
自尊感情		29.20 (5.28)	31.21 (5.12)	30.16 (5.62)	3.25* 片思い＞していない
競争的達成動機		4.73 (0.90)	4.97 (0.75)	4.86 (0.96)	1.72 n.s.
平等主義的性役割態度		55.48 (8.04)	53.52 (8.30)	53.79 (8.47)	1.92 n.s.

カッコ内は標準偏差　*p＜.05,　***p＜.001

Table 3　今まで付き合った人数による各尺度の平均値の比較

		0人（N＝78）	1人（N＝74）	2人（N＝48）	3人（N＝47）	4人以上（N＝65）	F値
恋愛に対する態度	恋愛至上主義	2.22 (0.67)	2.34 (0.55)	2.38 (0.56)	2.40 (0.70)	2.52 (0.66)	2.13 n.s.
	恋愛のパワー	3.06 (0.71)	3.21 (0.59)	3.21 (0.51)	3.34 (0.56)	3.37 (0.50)	2.84* 4人以上＞0人
	結婚への恋愛	3.20 (0.36)	3.20 (0.44)	3.18 (0.36)	3.05 (0.55)	3.05 (0.51)	1.56 n.s.
	理想の恋愛	2.67 (0.58)	2.71 (0.54)	2.77 (0.51)	2.73 (0.62)	2.75 (0.59)	0.30 n.s.
不快情動回避心性		3.94 (1.14)	3.79 (1.07)	4.18 (0.98)	3.97 (1.27)	4.07 (1.03)	1.09 n.s.
自尊感情		29.63 (4.72)	29.93 (5.81)	30.21 (6.36)	29.94 (5.28)	29.90 (5.31)	0.09 n.s.
競争的達成動機		4.68 (0.93)	4.90 (0.73)	5.06 (0.83)	4.63 (1.04)	4.86 (0.91)	2.08 n.s.
平等主義的性役割態度		55.40 (8.38)	54.51 (7.68)	53.38 (8.26)	55.49 (8.51)	54.18 (8.47)	1.22 n.s.

カッコ内は標準偏差　*p＜.05

0-20）人であり、分布を考慮して「0人」、「1人」、「2人」、「3人」、「4人以上」に分けて分析を行った。その結果、恋愛に対する態度尺度のうちの「恋愛のパワー」は5群間に有意差が認められた（F（4, 145.03）＝2.84，p＜.05）。Tukey法による多重比較を行った結果、「4人以上」が「0人」よりも有意に得点が高く、恋人の存在によって恋愛のパワーを感じるようになるという和田（1994）の結果と合致したものと考えられた。

次に、各尺度得点を従属変数とし、過去数か月間の失恋の有無を独立変数としたt検定を行った（Table 4）。その結果、恋愛に対する態度尺度のうちの「恋愛至上主義」（t（322）＝2.37，p＜.05）、「不快情動回避心性」尺度（t（322）＝2.19，p＜.05）、「自尊感情」尺度（t（145.09）＝2.19，p＜.05）に有意差が認められた。「恋愛至上主義」は「失恋経験あり」が「失恋経験なし」よりも有意に得点が高く、失恋をした者は自分を納得させるために恋愛を理想化し、恋愛至上主義的になるという和田（1994）の結果と一致していた。「不快情動回避心性」尺度は「失恋経験あり」が「失恋経験なし」よりも有意に得点が高く、「自尊感情」尺度は「失恋経験なし」が「失恋経験あり」よりも有意に得点が高かった。桜井（2000）、外山・桜井（1999）では、ネガティブな日常的出来事の経験は自尊感情や精神的健康を悪化させることが明らかにされており、本研究の結果はこれらの先行研究と合致したものと考えられた。

以上のように、本研究の結果は先行研究の結果とほぼ一致していた。したがって、現在の青年における恋愛に対する態度と草食系男子・肉食系女子増加の要因といわれている変数の性差と恋愛状況による差は、過去の研究とほぼ同様の傾向であると考えられた。

現在の青年と過去の青年の比較

現在の青年と過去の青年における恋愛に対する態度、不快情動回避心性、自尊感情、競争的達成動機、平等主義的性役割態度を比較するため、現在の青年と過去の青年の「恋愛に対する態度」、「不快情動回避心性」、「自尊感情」、「競争的達成動機」、「平等主義的性役割態度」を独立変数、各尺度得点を従属変数としたt検定を行った（Table 5）。分散が等質でない場合には、Welchの方法を用いた。

男性においては、恋愛に対する態度尺度では「理想の恋愛」（t（168）＝3.04，p＜.01）に有意差が認められ、現在の青年男性が過去の青年男性よりも有意に得点は高かった。その他の下位尺度では有意差は認められなかった。これより、過去と比較して現代の青年男性の恋愛に対する態度はほぼ変わらないことが示され、過去と比較して現代の青年男性が恋愛に非積極的であるとはいえず、むしろ理想の恋愛を志向する傾向は高まっていることから恋愛に積極的になっている可能性さえあることが示唆された。「草食系男子」増加の要因といわれている変数では、「自尊感情」尺度（t（346.66）＝4.53，p＜.01）と「平等主義的性役割態度」尺度（t（203）＝2.95，p＜.01）に有意差が認められた。「平等主義的性役割態度」尺度（t（203）＝2.95，p＜.01）は現在の青年男性が過去の青年男性よりも有意に得点は高く、男女平等の教育を受けて育った現代の青年男性は過去と比較して男女平等志向性が高いという言説と合致していた。しかし、「自尊感情」尺度（t（346.66）＝4.53，p＜.01）は現在の青年男性が過去の青年男性よりも有意に得点は高く、過去と比較して自信のない青年男性が増加しているという言説と合致しなかった。さらに、その他の「草食系男子」増加の要因といわれている変数においても有意差は認められず、これらの結果を踏まえると、「草食系男子」増加の要因といわれている変数は過去と比較して必ずしも上昇しているとはいえないということが示唆された。

女性においては、恋愛に対する態度尺度では「恋愛至上主義」（t（335）＝3.84，p＜.01）と「恋愛のパワー」（t（335）＝4.63，p＜.01）に有意差が認められ、過去の青年女性が現在の青年女性よりも有意に得点が高かった。これより、過去と比較して現代の青年女性が恋愛を至上的でパワーを感じるものとは捉えていないことが示され、過去と比較して現代の青年女性が恋愛に積

Table 4　過去の失恋の有無による各尺度の平均値の比較

		失恋経験あり（N＝93）	失恋経験なし（N＝231）	t値
恋愛に対する態度	恋愛至上主義	2.49（0.68）	2.31（0.60）	2.37*
	恋愛のパワー	3.31（0.56）	3.19（0.62）	1.64
	結婚への恋愛	3.13（0.45）	3.17（0.46）	0.76
	理想の恋愛	2.73（0.58）	2.72（0.57）	0.24
不快情動回避心性		4.19（1.06）	3.90（1.09）	2.19*
自尊感情		28.78（6.09）	30.35（5.03）	2.19*
競争的達成動機		4.78（0.91）	4.83（0.88）	0.49
平等主義的性役割態度		53.82（8.31）	54.82（8.22）	1.00

カッコ内は標準偏差　*p＜.05

Table 5　過去と現在における各尺度の平均値の比較数

		男性	女性
恋愛に対する態度	恋愛至上主義	0.83 過去＝現在	3.84** 過去＞現在
	恋愛のパワー	1.34 過去＝現在	4.63** 過去＞現在
	結婚への恋愛	0.80 過去＝現在	0.00 過去＝現在
	理想の恋愛	3.04** 過去＜現在	1.49 過去＝現在
不快情動回避心性		1.10 過去＝現在	3.38** 過去＜現在
自尊感情		4.53** 過去＜現在	3.81** 過去＞現在
競争的達成動機		1.71 過去＝現在	2.16* 過去＜現在
平等主義的性役割態度		2.95** 過去＜現在	3.81** 過去＜現在

値はt値　*p＜.05，**p＜.01

極的であるとはいえず、むしろ消極的になっている可能性があることが示唆された。「肉食系女子」増加の要因といわれている変数では、「不快情動回避心性」尺度（t（357）＝3.38，p＜.01）、「自尊感情」尺度（t（447.12）＝3.81，p＜.01）、「競争的達成動機」（t（354）＝2.16，p＜.05）、「平等主義的性役割態度」尺度（t（281）＝3.81，p＜.01）に有意差が認められた。「自尊感情」尺度は過去の青年女性が現在の青年女性よりも有意に得点が高く、「不快情動回避心性」尺度、「平等主義的性役割態度」尺度は現在の青年女性が過去の青年女性よりも有意に得点が高かった。これらの結果は、過去と比較して現代の青年女性は自信がなく、傷つきやすい一方で、男女平

等志向性は高いという言説と合致していた。しかし、「競争的達成動機」は、現在の青年女性の方が過去の青年女性よりも有意に得点が高く、過去と比較して現代の青年女性は競争心が低下しているという言説と合致しなかった。このように、女性においては過去と比較して恋愛に対する態度の消極化や競争心の上昇、自尊感情の低下が認められたが、これは、近年の男女共同参画社会の実現に伴い、女性が恋愛ではなく社会での評価を求めるようになった一方で、傷つく体験をすることも多いためであると考えられた。

恋愛に対する態度の規定因の検討

傷つきやすさ、自信のなさ、競争欲、男女平等感が恋愛に対する態度に与える影響を検討するため、「不快情動回避心性」尺度、「自尊感情」尺度、「平等主義的性役割態度」尺度、「競争的達成動機」を独立変数、恋愛に対する態度尺度の各下位尺度を従属変数とした強制投入法による重回帰分析を行った。

男性における結果をTable 6に示す。「恋愛至上主義」は「競争的達成動機」と有意な正の関連が認められ（$\beta = .24$, $p < .05$）、「恋愛のパワー」は「自尊感情」尺度（$\beta = .22$, $p < .05$）、「競争的達成動機」（$\beta = .39$, $p < .001$）と有意な正の関連が認められた。青年にとって恋愛は重大な関心事であり（松井，1990）、恋愛関係が順調であることは社会的な成功や承認を意味することが考えられる。そのため、社会から評価されることを目指す達成動機や自尊感情が高いほど恋愛をより意義深いものと捉え、恋愛至上主義的で恋愛のパワーを感じやすくなることが示唆された。「理想の恋愛」は、「不快情動回避心性」尺度と有意な正の関連が認められた（$\beta = .29$, $p < .01$）。青年の恋愛には葛藤が生じやすく、恋愛は青年にとって悩みの源泉でもあるともいえる（松井，1990）。そのため、現実の恋愛関係における不快情動を避けようとするほど恋愛を理想化する傾向が高まることが示唆された。また、「恋愛至上主義」（$\beta = -.36$, $p < .001$）と「理想の恋愛」（$\beta = -.28$, $p < .01$）は、「平等主義的性役割態度」尺度と有意な負の関連が認められた。和田（1994）では、男女それぞれの性に適した性役割認知が恋愛のロマンチック度を高めることが示唆されている。したがって、性役割に対する平等志向性が高いほど恋愛のロマンチック度は低く、恋愛を理想化して考えていないことが考えられた。また、「結婚への恋愛」には有意な関連が認められる変数はなかったが、これは本研究の調査対象は大学生であり、恋愛と結婚を関連付けて考えにくいためであったと推察される。

以上のように、「草食系男子」増加の要因といわれている変数のうち、いくつかの変数は青年男性の恋愛に対する態度に有意な関連が認められた。しかし、その他全体の半数以上の変数は恋愛に対する態度の下位尺度と有意な関連は認められなかった。したがって、現代の青年男性の恋愛に対する態度は、「草食系男子」増加の要因といわれている変数に必ずしも起因して

Table 6　恋愛に対する態度とその他の尺度の関連（男性）

	恋愛至上主義	恋愛のパワー	結婚への恋愛	理想の恋愛
不快情動回避心性	−.03	.05	.11	.29**
自尊感情	−.08	.22*	−.06	.01
競争的達成動機	.24*	.39***	.06	−.03
平等主義的性役割態度	−.36***	−.09	.11	−.28**
重相関係数	.18***	.18**	.00	.16***

数値は標準偏回帰係数　*$p < .05$, **$p <$. 01, ***$p < .001$

Table 7　恋愛に対する態度とその他の尺度の関連（女性）

	恋愛至上主義	恋愛のパワー	結婚への恋愛	理想の恋愛
不快情動回避心性	.19**	.13	.03	.08
自尊感情	.08	.18**	.01	.09
競争的達成動機	.01	.05	.04	.06
平等主義的性役割態度	−.43***	−.28***	.00	−.34***
重相関係数	.24***	.12***	.02	.13***

数値は標準偏回帰係数　**p＜.01，***p＜.001

Table 8　草食系男子・肉食系女子の増加イメージ

		増えた	変化なし・減った	χ^2値
草食系男子	度数	166	171	
	%	49.26	50.74	0.07 n.s.
	期待度数	168.5	168.5	
肉食系女子	度数	107	228	
	%	31.94	68.06	43.70**
	期待度数	167.5	167.5	

**p＜.01

いるとはいえないということが示唆された。

女性における結果をTable 7に示す。男性における結果と同様に、「恋愛のパワー」は「自尊感情」尺度（β＝.18，p＜.01）と有意な正の関連が認められた。しかし、「恋愛至上主義」と「恋愛のパワー」はともに「競争的達成動機」とは有意な関連は認められず、「恋愛至上主義」は「不快情動回避心性」尺度と有意な正の関連が認められた（β＝.19，p＜.01）。これは、近年の男女共同参画社会の実現により女性が男性と同等に社会で活躍できるようになり、現代の青年女性にとって社会的な評価が恋愛であるとは限らず、社会で傷つくことを避けるがゆえに恋愛に依存的になるためであると考えられた。また、男性における結果と同様に、「恋愛至上主義」（β＝−.43，p＜.001）、「恋愛のパワー」（β＝−.28，p＜.001）、「理想の恋愛」（β＝−.34，p＜.001）は「平等主義的性役割態度」尺度と有意な負の関連が認められ、「結婚への恋愛」は、有意な関連が認められる変数はなかった。

以上のように、女性においても「肉食系女子」増加の要因といわれている変数のうち、いくつかの変数は青年女性の恋愛に対する態度に有意な関連が認められたが、半数以上の変数において有意な関連は認められなかった。したがって、男性における結果と同様に、現代の青年女性の恋愛に対する態度は「肉食系女子」増加の要因といわれている変数に必ずしも起因しているとはいえないということが示唆された。

青年の草食系男子・肉食系女子増加のイメージ

草食系男子・肉食系女子が現代の青年の間で増加しているという言説が青年に流布している程度を検討するため、過去と比較して草食系男子・肉食系女子が増えたと思うかについて「増

えたと思う」、「変わらないと思う」、「減ったと思う」と答えた者の人数を集計し、χ^2検定を行った（Table 8）。草食系男子・肉食系女子ともに、過去と比較して「減ったと思う」と答えた者はそれぞれ全体の0.3%（１人）、3.0%（10人）と少なく、「変わらないと思う」と答えた者と合わせて分析を行った。

その結果、草食系男子においては、増加のイメージの度数に有意な偏りは認められず（χ^2（１）＝0.07，n.s.）、現代の青年に草食系男子が減ったもしくは変わらないと考える青年と同等に、草食系男子が増えたと考える青年が存在していることが確認された。したがって、青年のおよそ２人に１人は現代の青年男性の間に草食系男子が増加していると考えており、「草食系男子」増加の言説は広く青年に流布していることが示唆された。

肉食系女子においては、増加のイメージの度数に有意な偏りが認められ、「変わらないと思う」または「減ったと思う」は「増えたと思う」よりも有意に多かった（χ^2（１）＝43.70，p＜.01）。しかし、肉食系女子が増えたと考える青年の数は全体の３割以上を占めていることが確認された。したがって、青年のおよそ３人に１人は現代の青年女性の間に肉食系女子が増加していると考えており、「肉食系女子」増加の言説についても「草食系男子」増加の言説と同様に、広く青年に流布していることが示唆された。「肉食系女子」増加の言説は、「草食系男子」増加の言説よりも流布の程度は低かったが、これは肉食系女子が草食系男子の流行の後に派生した言葉であり、草食系男子よりも認知度が低いためであると考えられた。

青年の草食系男子・肉食系女子増加のイメージの根拠

草食系男子が「増えたと思う」、「変わらないと思う」、「減ったと思う」と考える根拠について、14のサブカテゴリーからなる５のカテゴリーを作成し、分類を行った（Table 9）。５のカテゴリーは、「流行」、「環境の変化」、「男性の変化」、「経験」、「その他」である。

そして、どのような根拠から草食系男子が「増えたと思う」、「変わらないと思う」または「減ったと思う」と考えているのかを検討するため、各カテゴリーに分類された回答数について草食系男子の増加のイメージ（２）×カテゴリー（５）のχ^2検定を行った（Table 10）。その結果、草食系男子の増加のイメージによってカテゴリーに分類された回答数に有意な偏りが認められた（χ^2（４）＝12.48，p＜.05）。残差分析を

Table 9　草食系男子の増加イメージ理由の分類カテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	説明	例
流行	伝聞	周囲からの伝聞	よく聞くから
	言葉の出現	言葉が出来たことによる影響	言葉が出来て注目されているだけ
	メディアの報道	メディアの報道による影響	TVなどで取り上げられているから
環境の変化	社会の変化	社会や世間の変化による影響	草食系男子が許される社会になったから
	男女関係の変化	男女間の接触が変化したことによる影響	男女のコミュニケーションが減ったから
	メディアの発達	インターネット、SNSの普及の影響	SNSなどが増えて直接誘うことが減った
	恋愛以外の楽しみ	恋愛以外の楽しみが増えたことの影響	恋愛よりも趣味を優先する人が増えた、恋愛よりも楽しいと思える物事が増えた
	女性の変化	女性の変化による影響	女性が積極的になったから
男性の変化	恋愛行動をとらない男性の増加	積極的に恋愛行動をとらない男性が増加したことによる影響	男性が女性を誘うことが減った、恋愛に消極的な人が増えた
	性格・個性	男性個人の性格・個性による影響	内気な男性が増えた、女々しい男性が増えた、人それぞれの性格や考え方は変わらない
経験	身近な実在	周囲の草食系男子の存在からの判断	自分の周りに草食系男子がいるから、草食系男子と出会ったことがあまりない
	感覚・実感	感覚・実感による判断	なんとなく、実感がない
	比較対象の不在	現在・過去の状況の比較が困難であることよる判断不能	過去が分からない、異性と接する機会がないから現状が分からない
その他	その他	上記のカテゴリーにあてはまらないもの	

Table 10　草食系男子の増加イメージとその理由

		増えた	変化なし・減った	χ^2値
流行	度数	18	26	
	調整済み残差	−1.20	1.20	
環境の変化	度数	18	10	
	調整済み残差	1.70	−1.70	
男性の変化	度数	37	23	12.48*
	調整済み残差	2.30*	−2.30*	
経験	度数	27	41	
	調整済み残差	−1.90†	1.90†	
その他	度数	1	5	
	調整済み残差	−1.60	1.60	

†$p < .10$,　*$p < .05$

Table 11　肉食系女子の増加イメージ理由の分類カテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	説明	例
流行	伝聞	周囲からの伝聞	よく聞くから
	言葉の出現	言葉が出来たことによる影響	言葉が出来て注目されているだけ
	メディアの報道	メディアの報道による影響	TVなどで取り上げられているから
環境の変化	社会の変化	社会や世間の変化による影響	女性の社会的地位が上がったから、肉食系女子が許される社会になったから
	恋愛以外の楽しみ	恋愛以外の楽しみが増えたことの影響	恋愛よりも楽しいと思える事が増えたから、自分の仕事と趣味があり時間がない
	男性の変化	男性の変化による影響	男性が草食化したから
女性の変化	恋愛行動をとる女性の増加	積極的に恋愛行動をとる女性が増加したことによる影響	積極的な女性が増えた、自ら男性にアプローチする女性が多くなった
	性格・個性	女性個人の性格・個性による影響	コミュニケーション能力が高い女性が増えた、人それぞれの性格や考え方は変わらない
経験	身近な実在	周囲の肉食系女子の存在からの判断	自分の周りに肉食系女子が多いから、周りに肉食系女子があまりいない
	感覚・実感	感覚・実感による判断	なんとなく、実感がない
	比較対象の不在	現在・過去の状況の比較が困難であることよる判断不能	過去が分からない、異性と接する機会がないから現状が分からない
その他	その他	上記のカテゴリーにあてはまらないもの	

行った結果、草食系男子が「増えたと思う」と考える根拠は「男性の変化」が有意に多かった。「男性の変化」に分類された内容は現代の青年男性の特性を述べたものが多く、近年のメディア等で「草食系男子」増加の要因といわれている内容と一致しているといえる。また、草食系男子が「変わらないと思う」または「減ったと思う」と考える根拠は「経験」が有意傾向であるが、多かった。したがって、大久保ら（2014）の結果と同様に、メディアの誤った情報を鵜呑みにせずに周囲の状況や実際の対人関係における経験により考えることで、言説に振り回されずに判断出来ることが示唆された。

肉食系女子についても同様に、「増えたと思

Table 12　肉食系女子の増加イメージとその理由

		増えた	変化なし・減った	χ^2値
流行	度数	10	23	
	調整済み残差	−0.60	0.60	
環境の変化	度数	14	5	
	調整済み残差	3.70**	−3.70**	
女性の変化	度数	24	27	24.45***
	調整済み残差	2.10*	−2.10*	
経験	度数	15	48	
	調整済み残差	2.30*	2.30*	
その他	度数	3	20	
	調整済み残差	2.30*	2.30*	

*p＜.05,　**p＜.01,　***p＜.001

う」、「変わらないと思う」、「減ったと思う」と考える根拠について、14のサブカテゴリーからなる５のカテゴリーを作成し、分類を行った(Table 11)。５のカテゴリーは、「流行」、「環境の変化」、「女性の変化」、「経験」、「その他」である。

そして、各カテゴリーに分類された回答数について肉食系女子の増加のイメージ（２）×カテゴリー（５）のχ^2検定を行った(Table 12)。その結果、肉食系女子の増加のイメージによってカテゴリーに分類された回答数に有意な偏りが認められた(χ^2（４）＝24.45,　p＜.001)。残差分析を行った結果、肉食系女子が「増えたと思う」と考える根拠は「環境の変化」、「女性の変化」が有意に多かった。これらのカテゴリーに分類された内容は、現代の青年女性の特性や現代社会の変化を述べたものが多く、近年のメディア等で「肉食系女子」増加の要因といわれている内容と一致しているといえる。また、肉食系女子が「変わらないと思う」または「減ったと思う」と考える根拠は「経験」、「その他」が有意に多かった。したがって、草食系男子の増加と同様に、周囲の状況や実際の対人関係における経験によって判断することで、肉食系女子が増加しているとは考えないことが示唆された。

総合考察

本研究の目的は、過去と比較して現代の青年に恋愛に積極的でない青年男性を指す「草食系男子」と恋愛に積極的である青年女性を指す「肉食系女子」が増加しているという言説を検討することであった。そのため、大学生を対象に恋愛に対する態度と草食系男子・肉食系女子増加の要因といわれている、傷つきやすさ、自信のなさ、競争欲、男女平等感を信頼性・妥当性の確認された尺度を用いて測定し、検討を行った。その結果、現代の青年男性の恋愛に対する態度の消極化と「草食系男子」増加の要因といわれている変数の上昇は認められず、女性においても恋愛に対する態度の積極化と「肉食系女子」増加の要因といわれている変数の上昇は認められなかった。さらに、現在の青年における恋愛に対する態度は草食系男子・肉食系女子増加の要因といわれている変数に起因しているとはいえないということも明らかになり、社会に流布する草食系男子・肉食系女子に関する言説が必ずしも現代の青年にあてはまるとはいえないということが示唆された。

また、草食系男子・肉食系女子増加のイメージとその根拠との関連を検討した結果、青年のおよそ２人に１人は草食系男子が増加したと考え、３人に１人は肉食系女子が増加したと考えていることが明らかになり、草食系男子・肉食系女子増加の言説は広く青年の間に流布していることが示唆された。さらに、草食系男子・肉食系女子が増加したと考える理由の多くはメディアで頻繁に取り上げられている内容と一致しており、変わらないまたは減ったと考える理由には実際の自らの経験によるものが多いということが明らかになった。したがって、メディア等の誤った情報を鵜呑みにしてしまうことで言説を信じてしまい、実際の自らの経験により言説に振り回されずに判断出来ることが示唆された。本来、恋愛の積極性には個人の特性や思考が深く関与しており、「草食系男子」や「肉食系女子」と呼ばれる青年は過去も現代も同様に存在することが考えられる。言説に惑わされて現代の青年を一括りに草食系男子・肉食系女子が増加したと捉えてしまうことにより、青年個人の特性や思考は見えなくなる。その結果、個々の青年がもつ多様な個性や長所に気付くことが困難になってしまう。このように、実証的なデータにより言説を検討し、言説によって何が隠されているのかを明らかにすることが重要であるといえる。

本研究の課題としては、２点挙げられる。１つは、調査対象の問題である。今回の調査は、限られた地域における被験者に実施されたものであり、さらに被験者数も十分とは言い難い。したがって、今後さらにサンプルサイズを拡大した調査が必要である。もう１つは、「草食系男子」の概念の問題である。本研究では、「草食系男子」を「恋愛に積極的でない青年男性」、「肉食系女子」を「恋愛に積極的である青年女性」と定義して検討を行った。しかし、草食系男子・肉食系女子を別の観点から論じることも可能である。例えば、「草食系男子」は単に恋愛に積極的でないというのではなく、異性の内面を重視し、時間をかけて関係を築きたいと考える青年であるといった議論も存在する（深澤，2007；森岡，2011）。したがって、こうした観点から草食系男子・肉食系女子を捉えて再検討する必要性もあると考えられる。

引用文献

深澤真紀　2007　平成男子図鑑　リスペクト男子としらふ男子　日経BP社

福森崇貴・小川俊樹　2005　不快情動回避心性尺度の作成　筑波大学心理学研究，29，125-130.

Hendrick, C. & Hendrick, S. 1986 A theory and method of love. Journal of personality and social psychology, 50（2），392-402.

Hendrick, S. & Hendrick, C. 1995 Gender difference and similarities in sex and love. Personal Relationships, 2, 55-65.

星野命　1970　感情の心理と教育　児童心理，24，1445-1477.

堀野緑・森和代　1991　抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因　教育心理学研究，39（３），308-315.

金子由美子　2009　思春期クライシスに寄り添う第12回　ジェンダークライシスと草食系男子　月刊学校教育相談，23（４），82-86.

加藤司　2012　男性は片思いの影響を受けやすい？片思いのメリット・デメリット尺度の開発　東洋大学社会学部紀要，49，115-126.

高坂康雅　2011 “恋人を欲しいと思わない青年” の心理的特徴の検討　青年心理学研究，23，147-158.

厚生労働省　2014　平成25年度版厚生労働白書―若者の意識を探る―　厚生労働省

松井豊　1990　青年の恋愛行動の構造　心理学評論，33（３），355-370.

松井豊　1998 恋愛における性差　現代のエスプリ，368，113-121.

水野邦夫　2006　恋愛心理尺度の作成と恋愛傾向の特徴に関する研究―Leeの理論をもとに―　聖泉論叢　14，35-52.

森和代・堀野緑　1989 達成動機とSocial Supportとの関係―その３：性差について　日本教育心理学会総会発表論文集　31，240.

森岡正博　2011「草食系男子」の現象学的考察　The Review of Life Studies, 1, 13-28.

日本性教育協会（編）　2011「若者の性」白書；青少年の性行動全国調査報告，第７回　小学館

日経BP社　2009　深澤真紀の草食の時代　草食男子は，なぜ婚活しないのか　日経Bizアカデミー BizCOLLEGE　2009年10月８日＜http://www.nikkeibp. co.jp/article/nba/20091006/186773/ ＞（March1, 2015）

日経BP社　2011「草食男子」世代を攻略するマーケティングとは～対談・深澤真紀　日経トレンディネット　2011年11月16日＜http://trendy.nikkeibp.co.jp/article/column/20111021/1038394/ ＞（March1, 2015）

大久保智生・牧郁子（編）　2011　実践をふりかえるための教育心理学：教育心理にまつわる言説を疑う　ナカニシヤ出版

大久保智生・澤邉潤・赤塚佑果　2014 「子どものコミュニケーション能力低下」言説の検討―小学生と大学生を対象にした調査から―　香川大学教育実践総合研究，29，93-105.

小塩真司　2000　青年の自己愛傾向と異性関係―異性に対する態度，恋愛関係，恋愛経験に着目して―　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学，47，103-116.

パートナーエージェント　2011　20代～40代の男女1392名に聞いた！「草食男子・肉食女子」に関するアンケート調査　パートナーエージェント　2011年２月28日＜www.p-a.jp/company/pdf/release_20110228.pdf＞March1, 2015）

Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Prinston University Press

桜井茂男　2000　ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討　筑波大学発達臨床心理学研究，12，65-71.

鈴木淳子　1994　平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成　心理学研究，65（１），34-41.

外山美樹・桜井茂男　1999　大学生における日常的出来事と健康状態の関係：ポジティブな日常的出来事の影響を中心に　教育心理学研究　47（３），374-382.

牛窪恵　2010　最近話題の「草食系男子」とは？　児童心理，64（２），金子書房　106-110.

和田実　1994　恋愛に対する態度尺度の作成　実験社会心理学研究，34（２），153-163.